『論叢』玉川大学教育学部紀要　2016，pp. 101～116

［原著論文］

観光の教育力と教材開発による人材育成
――那覇国際高校（SGH）への出前授業を通して――

寺本　潔

要　約

観光という事象を総合的学習や社会系科目に学習課題として導入することの意義について実証的に出前授業を通して明らかにすることが，本稿の目的である。観光は，沖縄県においてとりわけ重要な産業になっており，那覇市に位置する高校においては普通科の内容としても扱うに相応しい内容と思われる。折しも，スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）の指定を受けている高校において提案性に富む実験的な授業が実施できた。今回，マーケティング基礎の内容を含む教材や地域ストーリーづくりの演習問題の開発により，観光教育は今後の沖縄県における人材育成としても大切なテーマであることが確認できた。

キーワード：インバウンド，観光資源，マーケティング基礎，人材育成，SGH

Ⅰ　はじめに

日本を訪れる訪日外国人（インバウンド）が急増している。平成28年12月末には2400万人を超え，政府は2020年の東京オリンピック開催時までに倍の4000万人の訪日客を目標値に掲げている。観光系の大学･学部･学科の新設も相次ぎ，高等学校に至っては主に商業系を軸に，北は青森県から南は沖縄県に至るまで合計11の観光関連学科・コースの新設に至っている。その教育課程を覗いて見れば，社会科教育と深く関わる観光基礎や観光産業理解，観光地理，地元学，旅行業務，観光コミュニケーションなどの科目が設けられ，海外修学旅行や地域理解の学習などの特色ある取り組みも行われるようになってきている。観光教育というジャンルを最初に提言した徳久・安村（2001）の著書においては，大学や専門学校，ホテル教育，生涯学習などの実務教育の場で教えられている観光教育の現状と課題が紹介されているものの，普通科の公教育においては触れられていない。高等学校における動向に関しても実業系高校の例が掲載されているに過ぎない。

しかし，実業系の観光教育科目が整備されつつあるとは言え，卒業後において観光業界への就職の保障が不安定であり，生徒が希望する職種（例えば，ホテルフロント係など）からの求

所属：教育学部教育学科　受理日　2017年2月7日

人が少なく，旅行業者は大卒を採用しているなどの課題も明らかとなっている。観光に関する学習範囲は広く，実業系の高校生にどの範囲まで学習させてよいかの判断に苦慮されているという（平成28年7月に仙台市で開催された全国高等学校観光教育研究大会における文部科学省初等中等教育局教科調査官西村修一氏の講演より）。今後，観光教育の実効性を高めるには，実業系高校だけでなく，普通科の高等学校においても何らかの取り組みが必要ではないだろうか。

ところで，高等学校の教育課程においては地理歴史科や公民科の改編が発表され，2単位の地理総合（必修）と地理探究（選択），歴史総合（必修），公共（必修）などの枠が決定されている。観光内容と最も密接にかかわる地理総合や地理探究の科目において何らかの観光現象が学習内容として扱われることは十分に考えられ，高等学校普通科において観光教育の足場が構築される可能性がある。

しかし，その具体的な指導目標や学習内容さらに指導法は全くと言ってよいほど開発されておらず，社会科教育学（とりわけ地理教育学）の学会レベルにおいても早急な検討が必要となっている。幸い，小学校段階においては筆者も編集委員の一人として作製に参画した『めんそーれー観光学習教材（第10版）』（沖縄観光コンベンションビューロー発行）があり，ツーリズムアワード2016において優秀賞を獲得し，一定の評価を観光業界から受けている。小学校はその意味で観光教育がいくぶん，導入しやすい土壌が耕されつつある。告示された新学習指導要領において社会科に観光内容が導入された。加えて，観光立県である沖縄県においてはインバウンドの増加に伴い，観光教育が持つ訴求力が一層強まるに違いない。

その反面，中学高校（普通科）においては現時点では観光の学びは皆無に近い。観光による社会の変化に関心を持ち，観光教育による人材育成を考える上で，高校（普通科）における観光授業を試行する必要がある。折しも，沖縄の県立那覇国際高校においては，文部科学省のSGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）の指定を受けておられ，観光を研究の柱の一つにされている。そのため，筆者の申し出と合致し，試行的な出前授業が実施できる運びとなった。当校のSGH構想調書に書いてある研究開発の概要には，次のように記されている。「島嶼圏における持続可能で自立した成長モデルの構築を目指し，沖縄の観光･健康･環境をサブテーマに課題研究を行う。海外派遣をとおして，モデル構築における諸課題を他国の生徒と共有，発表，討論を行い，アジア太平洋地域における自立したビジネスモデル構築に寄与する提案が可能なグローバルリーダーを育成する。」まさに，今日的な教育課題にダイレクトに向かう構想である。沖縄県という観光業がリーディング産業である土地ではあるものの，多くの都道府県のSGHの進展に寄与できる提案が可能である。以下，筆者が試みた出前授業の報告を軸に，高校観光教育のあり方を具体的な授業レベルにまで下して検討してみたい。

Ⅱ　観光教育の体系に関するフレームワーク

1　小中高の教育目標

筆者が考える小中高の観光教育目標は図1のような枠組みである。図1は，昨年の9月に長野県小諸市の教育講演会で使用したものであるが，小学校段階では，「小諸市や信州，自国への誇りと外国への視野（資源への気付き・多文化への寛容心）」が大事であると位置付けた。観光は，社会科に似て郷土や地方，自国，世界に対する理解がその基礎教養として身に付かなくてはならず，地域資源に対する気付きが磨かれなくてはならない。

とりわけ訪日外国人や他県からの観光客が自分の住む市町村を訪問した場合，他にない固有の資源が紹介できるのか，観光客が欲しているニーズやウォンツは何か，観光ルートの設定や交通網の整備は適切かなど地域住民として関心を強める学習が欠かせない。

中学校段階においては，「観光現象を題材にした問題解決学習」をアクティブ・ラーニングの教育方法を駆使し，楽しくてためになる学習指導を開発したいものである。例えば，自県にどうして多くの観光客がやってくるのか，外国からの観光客は自県の何を目的にやってくるのか，アジア圏の経済状況を鑑みてインバウンドが日本の経済や地元の雇用にもたらす貢献や観光による文化交流をもっと扱う必要がある。「観光は平和へのパスポート」という名言があるが，まさに観光教育は他国との相互理解や異文化への寛容心を養う教育効果に富んでいる。「観光のまなざし」という言葉が，観光学の名著であるアーリー著（1998）『観光のまなざし』で用いられているが，まさに中学校段階で育成したい見方・考え方である。

高等学校段階においては，社会人の手前であるため「確かな観光者」への資質を育成したい。ここで言う「確かな観光者」とは，高校生から大人になる過程で観光を肯定的に捉え，自身も積極的に旅行者（訪日外国人）と関わり，休暇を楽しみ国内外の旅行にも出かけていこうとする外向的な資質を持った観光知溢れる社会人を指す。高卒後，就職したり，専門学校や大学に進学したりするにせよ，観光産業への関心や職業意識を高める必要性は高い。なぜなら，観光

図1　長野県小諸市の教育講演会で使用した観光教育の体系案

は産業への波及が広汎であり，多くの職業で何らかの関連が生じてくるジャンルだからである。観光資源である自然，農産品，歴史や文化，イベントだけでなく，観光を支える社会資本整備（交通，各種インフラ，文化施設），サービス（ガソリンスタンド，百貨店，ホテル）産業に至るまで高校生が関心を抱く職業に直接間接的に関わってくる。その意味で，地理歴史や公民系，外国語系科目だけでなく，建設業やサービス産業，公務員系などの職業を目指すキャリア教育としても観光現象を意識する必要があろう。

2　観光教養と観光実務

観光系の高等学校や専門学校では，地元学や観光英語などの教養系科目だけでなく，簿記会計など商業系の科目に加え，空港職員やホテルスタッフ，ツアー会社社員などの観光関連職種に応じた実務が学べる。沖縄県最大の観光専門学校インターナショナルリゾートカレッジ（NBC学園）の『スクールガイド2017』を参照すれば，エアポート実務や通関士基礎，パーティコーディネイト，旅行マーケティングなどの科目名が見出せる。これらは，直接観光関連業に就職するための準備学習とも言えるが，同時に実業系高等学校だけでなく，普通科の観光教育においても観光の世界に興味関心を抱かせるキャリア教育の窓口になる。キャビンアテンダントやグランドスタッフなどの空港で働く仕事は，若者の憧れの職業でありブライダル系の業務も高水準のコミュニケーションスキルやマナーの習得が要求される。ツアープランナーは旅行先の豊富な地理歴史知識（観光教養）が必要とされる。普通科の高校生にとっても観光の学びは，諸教科で学ぶ知識や技能が実社会でどのように生きて働くのかを確かめる上で学習意欲を支える効果がある（写真1～3）。

例えば，暗記科目のレッテルが貼られている世界史の学習が生徒にとってどのような意味があるのかを考えてみよう。生徒自身が将来ヨーロッパに旅行出かける場合に役立つ知識であっ

写真1　機内を模したモックアップ室

写真2　ブライダル実習室

写真3　パンを配膳するレストラン実習（いずれも，那覇市にある
NBC学園インターナショナルリゾートカレッジにて筆者撮影）

たり，外資系の仕事で欧州のビジネスマンと会話したりする際の基礎教養として活きるだけでなく，ヨーロッパ諸国による植民地であった東南アジア（例えばシンガポールやベトナム）から来日した観光客の文化的背景として英国や仏国の存在を知っておくことは大事である。

とりわけ，観光教育が主要な教科学習と最も異なる点は，他者（観光客）の目線に立ってサービスを提供し，その土地の資源を観光に活かす力である。広い意味で「おもてなし教育」と言い換えても良い。先に述べたように実務系の学びは，専門的知識につながる職業情報であるが，そのさわりの部分は，普通科の高校生にも大いに関心を抱かせる内容である。総合的な学習の時間や特別活動の時間などを使い，観光業界の方を学校に呼んで体験実習を行ったり，専門学校が開催するオープンカレッジに参加し，モックアップ実習室を見学したりする機会を設けていけば，観光産業への理解を深めるだけでなく，他者目線に立つことの大切さを学べるため，効果が上がるだろう。

3　自文化に対する自覚の芽生え

観光業界が発展する過程において土地の自然や文化が改変されたり，損なわれたりするケースが国内外で発生している。いわゆる観光開発と環境保全の調和に関するテーマである。沖縄県の場合でも戦後，「本土化」と呼ばれる経済的・文化的な同質化の波は顕著であり，海洋博（1975年7月～76年1月）以降多くの自然ビーチが消失し食の洋風化や伝統文化の継承が困難な状況が続いている。象徴的な建物では，商業施設イオン・ライカム（本島中部）の出店によりいわば東京近郊の街と同じ風景が現出し，多様な都市的サービスが提供されている。言葉も標準語化が進展し，島言葉（ウチナーグチ）が一層希薄になりつつある。これらは一見，抗し難い文化変容ではあるものの，観光にとってはマイナスの作用を生じさせる。

なぜなら，沖縄が世界にない独特な自然と文化，社会を保持しているからこそ魅力的なので

あり，沖縄の固有性や土着の文化そのものに価値を見出したい観光客のニーズに応えられなくなってしまえば，元も子もない事態に陥るからである。沖縄の文化と地域社会を尊重し保護することと観光業界の発展が乖離することを避ける必要がある。そのため，観光業界と沖縄の伝統社会との間の協力関係を強化すること，沖縄の文化的知識や資源を持続させるための方法を観光業界も一緒になって考える機会を設けることが何よりも大事になってくる。そうした機会を観光教育の場がマーケティング・プログラムを創造することで実現できるかもしれない。島言葉と沖縄の歴史，文化及び価値観（例えば，めんそーれー）を保存し，県産品を空港や港，土産物店等で高校生が宣伝・販売の実習を体験することで沖縄の農業や伝統工芸をサポートすることにつながることだろう。

ところで，本土から沖縄に働きに来た従業員の中には，沖縄の歴史・文化に関する知識に欠ける者も多く沖縄本島と八重山や大東島の文化がいっしょくたに扱われるケースもあることから，彼らの沖縄文化に対する誤解を正す上でも，まずは地元の高校生に対する沖縄文化を学ぶ教育は必須であろう。今回，出前授業後の感想文を末尾に掲載したが，その中に「沖縄の魅力を語れない自分が少し悲しい」と表現した高校生がみられた。観光教育を通して自文化を知らない自分に気付くという効果が示された。

以上の観点を踏まえ，表1に筆者なりに沖縄県における今後必要とされる観光教育の目標を設定してみた。学校種別に整理しその目標が達成できるために必要な学習環境整備についても付記してみた。

表1　各学校段階における沖縄県独自の観光教育目標の設定

学校種	「観光知」獲得の目標と内容	学習環境整備
高等学校（普通科）	・「職業人としての観光者の基礎づくり」⇨地理歴史科を軸に，観光業界への就職先で必須の知識やスキルの習得 ・「確かな観光者としての自分づくり」⇨特に観光系大学・専門学校への進学のための総合学習	高大連携による観光学部進学準備，ホテル業界や旅行会社へのインターンシップ体験，観光地の地理・歴史情報の整備
中学校	・「観光のまなざしの獲得」⇨観光業界への1日訪問体験，業界研究とレポート作成（例：恩納村リゾートホテルの仕事研究，北部観光開発と環境保全の調和レポート，沖縄交通網整備と観光振興まちづくり，MICEやウエディング，スポーツ観光の企画立案） ・社会科観光，観光英会話，中国語の習得	総合的学習へのメニュー追加とテキスト整備，中学生の訪問受け入れ可能な業界の協力体制づくり，社会科内容との関連，移動バス費用の確保
小学校	・「自県や地域の資源再発見と観光の仕事理解」⇨挨拶とおじぎ，伝統工芸品の再評価 ・観光業で働く人をゲストに呼ぶ，観光統計の読取りと沖縄県の国際的な位置付け，空港・港湾，道路，鉄道等の社会資本整備の意義	社会科内容の観光単元への組み替え，本土との位置関係認識，沖縄の気候風土の特殊性を解説した観光副読本の整備

Ⅲ　那覇国際高校（SGH）における観光の授業

那覇市の新都心と呼ばれるおもろまちに当高校はある。進学校で有名な男女共学の公立高であり，明るい雰囲気の感じられる学び舎である。前述したように当高校がスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）の指定を文部科学省より受けており，研究主任が筆者が担当している教員免許更新講習（琉球大学）を受講されたことがきっかけとなった。教員免許更新講習では，琉球大学観光産業科学部の大島順子准教授と共に「観光の教育力と教材開発」をテーマに，1日の講習を開講している。ここでは，大島による大学生向けの水俣教育旅行報告のほか，小学校や中学校に勤務する教員に向け，諸教科で観光が題材として扱えることや，筆者が独自に開発した観光客が楽しめる沖縄観光プログラム立案，「やんばる」地域の観光開発と環境保全を考えるワークショップなどが扱われている。平成28年度は28名の受講生があり，その中に那覇国際高校の先生が参加されていた。

那覇市の観光基本計画を読んでみると今後，市は世界水準の観光リゾートを目ざしており，アジアにおけるゲートウェイの性格が観光政策の柱に据えられている。総合政策面では，観光は極めて重要視されているものの，その反面，教育界での具体的な教材開発や指導法の工夫はほとんど行われていない。本稿がその溝を埋める一助として役立つならば嬉しい限りである。

1　開発した高校普通科向け学習ワークと授業の実際

貴重な授業時間を頂いて頂き，筆者による出前授業が2授業時間実現できた。その主な内容を報告したい。

(1) 客層（セグメント）に応じた観光を考える

アイスブレイクとして筆者が考案した「観光地＋動詞＝楽しみ方」という観光行動を考える基本の課題学習を行った。これは既に沖縄県の小学生向けにも開発した指導法であり，昭文社発行の県別地図沖縄県を6人グループに配布し，沖縄県の地勢図を前に具体的な観光地をイメージさせつつ，20数枚の観光行動を示すイラストカードをヒントに動詞と合わせて観光客の楽しみ方をフレーズ（文）で案出させるものである。生徒が案出したフレーズは，「石垣島に行って青の洞窟を体験し，夜は星をみてもらう。また，石垣牛を食べてもらう。」「首里で沖縄そばを食べた後に写真を撮りながらレンタカーに乗って北谷に行き，マンゴーかき氷を食べてホテルに戻り俳句を読む。」などと言ったユニークな内容であった（写真4，5参照）。

今回，高校生向けに新たに思考の水準を上げ新しく三種のワークを開発した。一つは，観光客の属性（セグメント）に応じた観光内容のニーズを考えるもので，6つのセグメント（熟年層，ハネムーン，学生，若年層，海外ウェディング，ファミリー）のイラストカードを二軸シート（滞在型と目的型の軸と価格が安いと価格が高いの軸）のどこに位置づくのかを考えてもらう

写真4　地図上で沖縄県の観光プログラムを考え合う高校生

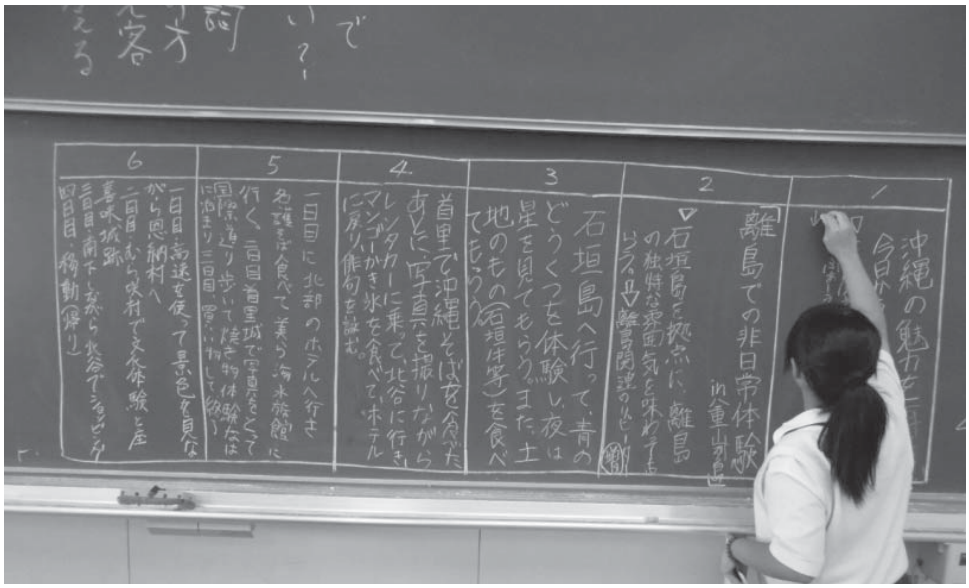

写真5　班で考えた一押し観光プログラム案

ワークである（図2)。これは観光マーケティングの基礎学習に相当する内容で，観光客目線で観光商品を考え出さなければならないという観光教育のいわば根本に当たる思考を促すワークとなっている。参考にした本は，森下晶美編著『新版観光マーケティング入門』同友館である。この書の中にポジショニング・マップと呼ばれるハワイのパッケージツアーを例に観光客の属性（セグメント）の特性を考えさせる内容が記述されており，それを元に演習問題として客層を示すセグメントを筆者の方でイラスト化し分かりやすく改良した。

ポイントは，①セグメント（観光客）には，どんな属性があるのか（お金と時間のゆとり）②どんなニーズがあるのか（観光の目的は？）である。

設定した客層は以下の6種である。

★6つのセグメントとその特性

学生：なるべく安くて，いろんな体験をしたい。ビジネスマン（社会人若年層）：学生よりは

写真6　筆者考案の8方位体操を学ぶ

写真7　二軸シートに観光客の客層を示す絵カードを配置する様子

写真8　沖縄感動体験プログラムについて解説する様子

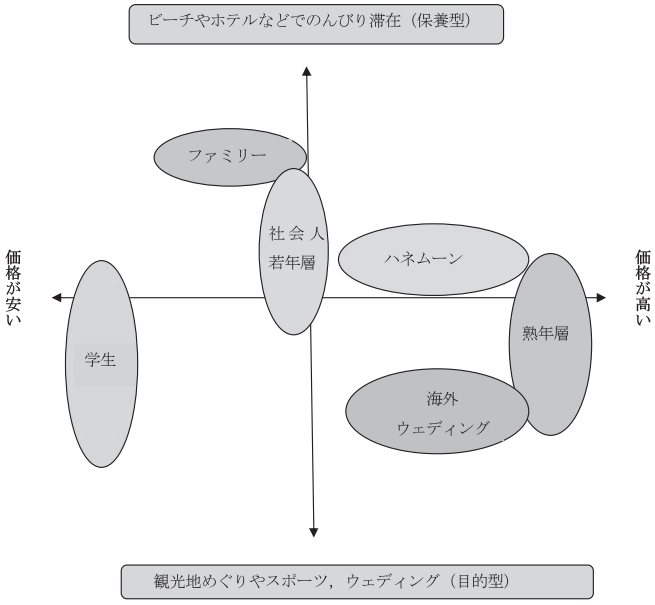

図2　沖縄を訪れた観光客のセグメントがどの位置にあるかを考える課題学習

注）上図は，森下晶美編著（2016）『新版 観光マーケティング入門』同友館，232ページを参考にした。

お金に余裕はあるが，ほどほどにし仕事で疲れているので少しはのんびりしたい。ハネムーン（新婚さん）：東京から来た新婚さん。一生に一度の思い出だから，少しはふんぱつして二人でゆっくりしたい。海外ウェディング：外国人（例えば韓国）なので沖縄という海外で挙式して二人の思い出づくりや両親への感謝を伝えたい。ファミリー：学生よりは金銭的に多少余裕あり，子ども連れだからビーチでのんびりもしたい。アクティブ・シニア（熟年層）：お金に余裕あり，アクティブに観光地めぐりやゴルフ，沖縄の伝統芸能を楽しみたい。＊ワークに必要な時間は，25分。

グループで対話しながら6種の客層カードを配置している様子を写真6～8に示した。実際の作業では，生徒自らがカードを手に取り，「ハネムーン客は一生に一度だから，たくさんのお金を使って豪華な旅行をするのでは？」「学生層ははやりアルバイトでためたお金で旅行するから格安の旅でいろいろと目的があると思う。」「熟年層は，お金は少しはあるけれど，のんびりしたいから滞在型ではないかしら。」などと客層の立場に立った対話が弾んでいた。二軸の思考ツールが生徒たちの主体的な対話を促し，観光客の立場や目線に応じた観光の特性という深い学びに達することができた学習となっていた。

(2) 沖縄観光MICEプランをつくる

二種目の教材は，MICEプランを考える課題である。MICEとは，Meeting, Incentive tour, Convention, Exhibitionの略。冬でも温かい沖縄はその気候を活かし1年中，会議や催しを開催できるメリットがある。そこで，国際的な会議を受け入れる誘致策を考えさせた。

生徒に提示した設定は以下の通りである。

設定：あなたは那覇国際旅行社（仮称）MICE営業担当の1年目。先日，海外のお客さんから突然，MICEを開催する都市を福岡市か那覇市にしようか迷っているとメールが届いた。業績をあげたいので，是非とも那覇市に誘致したいのでMICEプロポーザルを行うことに決心した。クライアントからの条件は以下の通りである。2日目午後は，会議参加者に楽しんでもらう地元ならではのお薦めプランをつくらなければならない。

クライアントから提示された条件

・2017年5月20日から21日まで（2日間）参加予定100名
・会議名「国際スポーツ振興会議2017（仮称）in Japan」
・予算500万円（会議参加者は1人3万円参加費として支払い＊フライト，宿泊費別）
・海外10ケ国からの参加（中東ドバイからも）
・2日目午後は，地元のお薦めプランを堪能したい（何でも可）

高校生にとって，実に具体的な場面の想定であったが，残念ながら話し合う途中に時間切れとなった。解答例として下記のような解答を用意していたが，高校生からのアイデアを引き出

す時間がなかった。参考までに解答例を掲載したい。
解答の1例：コンベンションの会場としては，那覇地区や西海岸の高級なホテルが必須。ムスリムの方の参加も予定されているため，食事にはハラールが施された食材が必須。2日目午後のプログラムとしては，スポーツ関係者なので2020東京五輪でも種目に採用された沖縄空手を体験させたい。プラス首里城や識名園見学もオプションで取り入れたい。＊ワークに必要な時間は，20分。

(3) 観光・地域ストーリーを考える（日本史が好きな生徒に提示）

三種目の課題は，歴史を活かした地域活性化策である。沖縄県の高校生にとって全く知識がない千葉県佐倉市の事例を題材として選んだことで既習知識の有無による差が生じないメリットがあると考えて作問した。筆者から提示した以下の文章を読み取り，市長になった想定で地域活性化策を考えさせることをねらった。
読み取る文章：江戸時代後期の寛政年間，佐倉藩主となった堀田正順（ほった まさなり）は，長崎で蘭学を学んだ人物を藩医として召し抱えた。それをきっかけに，さらに時代を映した文政年間の藩主・堀田正睦（ほった まさよし）は，蘭学（とりわけ医学）を習得させるべく，藩主数名を長崎へ向かわせた。時は鎖国のただなか。西洋文化の窓は遠く長崎にのみ開かれていた時代だ。

後年，新しい時代を見据えた正睦は，江戸の蘭学医・佐藤泰然を招聘（しょうへい）し，蘭医の塾と外科の診療所を兼ね備えた「順天堂」を創設した。数々の熱意ある経緯から，この地はいつしか「西の長崎，東の佐倉」と称されるほど蘭学の盛んな町として名を高めていった。

問い：佐倉藩のある佐倉市は，この歴史的なエピソードを活かして，観光でまちおこしを進めています。あなたが，この市の市長さんだったら，どのような観光の施策と地域ストーリーによる観光まちづくりを行いたいですか？

いろいろと生徒からストーリーを発言させた後に以下の答えを提示し，自分たちで考え合った観光の施策と照合させてみることで現実社会への参画意識も育めようと考えたが，これも今回は時間切れとなり生徒の考えを引き出すまでには至らなかった。参考までに解答例を以下に示したい。
解答例（実際の動き）:「佐倉と蘭学の歴史を広く今の時代に知らしめたい。」昭和62年（1987）年に市民有志が「佐倉日蘭協会」を立ち上げた。草の根の国際交流。協会はオランダの児童をホームステイに迎え，オランダ語講座を開設し，オランダ料理講習会を開くなど，積極的な活動を続けている。また，市の音楽ホールにはオランダ製のストリートオルガン（手回し式の装飾オルガン）が3台備えられている。オランダ人技師と日本の建築家が協力し，“博愛”を意味する「デ・リーフデ」と命名された風車が建てられたのは，平成6（1994）年。このシンボ

ルが完成したことも手伝って，地元では「日本とオランダの文化が並び立つ町」としての認識が定着している。（中略）風車の横手には印旛沼（いんばぬま）が拡がっている。デ・リーフデは単なるオブジェでなく，“水汲み”の動力として活用されている。オランダと同様に風車守が常駐し，風向きにあわせて羽根の台座を動かす。電動でなく，手動である。（『JALグループ機内誌スカイワード』2016年9月号，pp. 76～85より抜粋）

蘭学が江戸時代盛んであった歴史的な事実から，佐倉市がそれを活かしてどのような観光まちおこしの成果をあげているかを考えさせる問いである。SGHとしての課題研究にこのような観光で地域を活性化するための方策を生徒たちに考えさせる場面が必要ではないだろうか。なぜならば，高校の教科が「知識のつながり」を重視するのに比べ，総合的学習は「問いのつながり」を大事に扱うからである。ある意味で，答えの見出しにくい時代に突入しつつある現代において，観光というポジティブな切り口から，地域の課題解決を考える機会は「社会に開かれた教育課程」のよい事例となりうる。

2　高校生の反応

今回2時間連続の筆者による出前授業には，39人の1年生が受講してくれた。各クラス4，5名を募ったようであるが，8割は女子で，この種のテーマに女子が強い関心を抱く傾向が判明した。

授業の最後に3分間で書いてもらった感想文を3例紹介したい。

「観光プランを考えるときに今まではテーマまでしか絞らずに考えてきたが，『誰が』『何の為に』という客層とその趣向までは考えるとプランをたてやすいと分かった。また，私は今回の授業で一番大切（基本）だなと思ったのは，もし自分が観光客だったら何をするか，という点で考えるということです。これは本当に基本だと思っていましたが，どうしてもどうやったらお金をたくさん使ってもらえるのだろうかと先に考えてしまうことが多かったので『楽しんでもらう』を大前提にプランを考えたいです。（1年女子）」

「自分や他の人が行きたくなるような観光メニューを想像したり話し合ったりするのが，旅行気分になれて楽しかったです。『観光』はこういったワクワクする気持ちが大切なんだということが分かった気がします。また，後半観光客に沖縄の魅力を知ってもらうような感動ルートとは何かと考えた時，なかなか進みませんでした。そこから，自分が沖縄の魅力をよく理解していないことが分かりました。少し悲しいことですが，これから沖縄についてたくさん学習して自信を持って人におススメできるようになりたいです。（1年女子）」

「観光のターゲットを絞って考えてみたり，ちがう土地の行ってみたいところを考えてみたり沖縄をはなれて考えてみるのは初めてで，すごく新鮮だった。観光客の層を考えてプランをつくってみるのは今まで考えたことがなく，これからもっと考えてみたいと思いました。高校でもこの授業を受けてみたいと思いました。最後の町おこしの問題はとても難しかったけど，

もっと詳しく聞きたいなと思いました。(1年女子)」

これらの受講直後の作文からも観光の学びがもたらす学習の意義が明らかとなった。冒頭から6人1班のグループワークで進行し，対話を軸にアクティブ・ラーニングを展開したが，改めて観光は学習に積極性をもたらす効果が高いと言える。また，生徒たちが高校までに地元沖縄県の観光事象について，意外にもほとんど学んでこなかったことも露わになっている。観光知の底上げが必要であろう。

Ⅳ　社会科教育からの貢献

これから勃興する観光教育というカテゴリーを筆者が専門とする社会科教育が主導できるとしたら，どのような戦略で推進を図っていくべきだろうか。観光教育が単にお国自慢的な内容に陥ったり，形を変えた国際理解教育や環境教育になったりするだけなら社会科教育の出番は少ないだろう。地図や景観読解，移動ルート選定，地誌的知識の保有，観光客の目線に立った旅行商品の企画，観光地の歴史的な地域ストーリーを見つめる思考法などを駆使し，参加型学習プログラムをいくつも構築できていけば,社会科教育が観光教育の推進母体になれるだろう。例えば，小学校段階において第4学年の3学期の「わたしたちの県のようす」が配置されているが,この単元は自県の特色を観光の視点から捉え直すことができ,大幅に魅力アップできる。さらに，第5学年の情報の単元に観光業を支える情報の働きを扱えば，観光を題材に面白い学習が実現できる。第6学年の3学期に「日本とつながりの深い外国」を学ばせる単元が用意されているものの，現状では，その展開には臨場感と切実感が欠けている。ここに観光で外国へ出かける想定の学びを導入できれば，かなり改善できる。あるいは，インバウンドで来日している観光客とのかかわりを題材にしつつ，その国について学ぼうとする設定でもよい。

中学社会科地理的分野においても，例えば「ヨーロッパ地域」の地誌的学びでは，気候を活かした作物や食文化をテーマに容易に観光を窓にしつつ,学習が展開できる。「日本の諸地域」でも四国地方のゆず栽培やつま物を活かした町おこしを事例に教科書では学んでいるが，ここに観光客の視点を導入することでフードツーリズムの学習を窓にして四国の地理が描き出せる。歴史的分野においても文化財や歴史を活かした景観づくり（例えば，奈良県明日香村）などをテーマに扱えば，歴史も観光教育に貢献できる。観光政策，とりわけ世界遺産や日本遺産を扱えば，公民的分野にもかかわる内容につながってくる。

観光教育という新しいジャンルでは，もちろんこれら地理的内容や歴史的内容，公民的内容だけで成立するのではなく，ツーリズム産業のあり方，旅行企画立案，安全管理，ホスピタリティ精神，両替や為替の知識なども必要になり，実用的な能力を高めるには観光学を極めなくてはならない。

一方，実務的な能力育成はキャリア教育に依拠する側面が多く，教科では余り深入りできない。しかし小中高校段階においては，社会科系や外国語系教科が担う側面も多いのではないだ

ろうか。その根本は,「確かな観光者」は，確かな国土像・世界像を有していることが不可欠だからである。

他方，高校の「総合的な探究の時間」が論じられているが，基本的には生徒の考えを深める学び方を学ぶのが, 総合に期待される側面であるため, 内容は観光でなくてもいいわけである。しかし，沖縄県においては観光こそ総合のテーマにぴったりの地域であるため，本実践が意味をもってくる。総合の理念に詳しい白梅女子大の無藤隆教授は，その講演において「教科学習が“知識のつながり”を深めていくのに対し，総合は“様々な問い”をつなぎながら学びを深めていく」とした（平成28年11月13日立教大学における講演にて)。

また，観光は裾野が広く，農業との関わりでは観光農園や道の駅への出荷，ふるさと納税などの教材を通して扱える。工業との関わりでは，ものづくりの精神を学び技術の伝承や価値に気付かせる産業観光の視点がある。交通との関わりでは，観光ルートで使用する各種交通手段が登場する。観光客相手に英語で案内できる会話力こそ実践的である。さらに，観光開発による環境保全との調和や伝統文化の継承と観光資源化の関係を考える上において，ESD（持続発展教育)についても大いなる関連性が見出せるため, 多くの思索をめぐらすことが可能であろう。

Ⅴ　おわりに

昨年8月に文部科学省から次期学習指導要領（審議のまとめ）が発表された。その中に「学びの成果として生きて働く「知識・技能」，未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」，学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」を身に付けていくためには，学びの過程において子供たちが，主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり，多様な人々との対話を通じて考えを広げたりしていることが重要である。」という一文がある。まさに，観光の学びはこの指摘に応えることができる。観光は沖縄県のリーディング産業であるが，日本国においても既に大きなウェイトを占める産業として開花しつつある。政府は，今年観光庁の予算を倍増しており，観光立国から観光大国への道を歩もうとしている。日本橋で9月22日に開催されたツーリズムEXPO2016の前夜祭（グローバル観光フォーラム）では，世界の観光流通の中でアジア圏の伸びが著しいことが報告された。また，基調講演者であるデビッド・スコースィル（世界ツーリズム協議会理事長）氏は，次の4点の課題解決を日本に求めた。その4点とは，①スキルの向上や言語力を備えた人材育成，②大都市の宿泊所増への対応③空港の能力の拡大④客の地方への拡大である。人材育成が冒頭に挙げられた点が特に注目できる。また，最近の報道では，東京の観光人気度ランキングでも総合4位からパリを抜いて3位に上がっている。これは，安全で清潔・便利な東京の価値が改めて評価されたからにほかならない。

これらの観光を取り巻く世界の動向を正しく理解し，児童生徒の世界像を形成していくためにも初等・中等段階の社会科教育が果たす役割は大きい。現実には，総合的な学習の時間や外

国語教育との合科的扱いにより，特別単元を創作し地域の特性に応じた観光教育を立ち上げてほしい。市や県レベルにおいて観光の社会状況は大きく異なるため，観光教育は自治体の教育政策としての側面が強い。その意味で教育委員会と観光課（観光協会や観光コンベンションビューローも含む）の連携が必要になってくるだろう。

観光はオンワード（前向き）な姿勢を学習者に抱かせる力を秘めている。観光を通して様々な業種が連携できるし，観光交流によって人々の幸福感が助長される。観光資源化や観光商品化への努力は，生きがいとやりがいを生み出す。観光客の争奪をめぐり地域間や国家間の競争は激しくなるものの，結果として観光地の市民力を磨くことにもつながる。グローバルな社会において観光による社会の変容は，遮ることのできない自然の流れなのである。

謝辞

出前授業を受け入れて頂いた那覇国際高校の與座博好校長並びに研究主任の久山賢一先生，参観に来て頂いたJTB総合研究所の山崎誠様，沖縄観光コンベンションビューローの安次富貴子様，帝国書院の成田佳絵様ほか関係者の方々に深く感謝致します。また，専門学校の施設見学を快く受け入れて頂いたKBC学園ircの宮城良之様に記して感謝の意を表します。

参考文献

ジョン・アーリ著　加太宏邦訳（1998）:『観光のまなざし―現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局，289ページ。

徳久球雄･安村克己編著（2001）:『観光教育―観光の発展を支える観光教育とは―』くんぷる，251ページ。

佐藤克士（2013）:「観光研究の成果を組み込んだ「社会科観光」の授業開発とその評価―小学校第5学年産業学習「観光産業」を題材にして―」，『社会科教育研究』第118号，pp1～14.

寺本潔（2013）:「地理教育が主導する観光の授業―その学習の意義について―」，『地理学報告（愛知教育大学地理学会）』第115号，pp67～72.

吉崎誠二著（2013）:『職業としての観光―沖縄ツーリスト55年編―』芙蓉書房出版，191ページ。

寺本潔（2014）:「沖縄県の小学校における観光基礎教育の授業モデル構築と教材開発に関する研究」，『論叢（玉川大学教育学部紀要）2014』pp73～85.

JTB総合研究所編（2014）:『観光学基礎』同研究所発行，293ページ。

菊地達夫（2014）:「観光を題材とした地理授業の系統化と開発」，『北翔大学生涯学習システム学部研究紀要』第14号，pp1～14.

菊地達夫（2015）:「高校地理における観光を題材とした授業開発」，『大阪観光大学観光学研究所年報』第14号，pp1～6.

寺本潔・澤達大編著（2016）:『観光教育への招待』ミネルヴァ書房，165ページ。

寺本潔（2016）:「高校「地理歴史科」教育における現状と課題―地理総合を中心として―」，『玉川大学教師教育リサーチセンター年報』第6号，pp49～59.

＊本論文は，文部科学省科学研究費基盤研究（c）「学校教育における観光教育の教材開発とカリキュラム立案」（研究代表：寺本潔）による研究の一部である。

The Education Power of the Tourism and Talented People Rearing by Development of a Subject: Through the Delivery Service Class

Kiyoshi TERAMOTO

Abstract

The purpose of this research is to clear the meaning that tourism is introduced in integrated learning and the society subject. Tourism is especially important industry in Okinawa Prefecture. Tourism is thought the contents which are suitable for handling it even if it is made the contents of the general course at the high school in Naha City. I could enforce an experimental class at the high school, too. The practice problem of the subject which contains the contents of the marketing foundation to this time, and area story-making could be developed. Tourism education is an important theme even if talented people in future Okinawa Prefecture should be trained.

Keywords: inbound, tourist resources, marketing foundation, talented people rearing, SGH